

「ッテ文」について

近 藤 研 至

0 はじめに

森重(1954)は、文中のいろいろなところに現れるッテを記述したものとして先駆的なものである。しかし、しばしば先駆的であるということに共通して見られることであるが、ところどころに示唆的な説明を含みつつも網羅的な記述に終始しており、ッテについての統一的な説明ができているとは言い難い。森重(1954)の記述以後、ッテについての研究は、

- (1) 犬ってかわいいよね。
- (2) 明日田舎に帰るって言ってたよ。
- (3) 絶対におもしろいって。
- (4) 叩いたって音はでない。

というそれぞれの現象¹⁾について独立して示唆的な指摘がなされてきたと言つていいだろう。

小論は、(3)のような、文末がッテによって終止している文を取り上げる。(3)のようなタイプの文については、そうした現象を専門に扱っている論考中においてさえ名づけが統一的ではない。最近でも、野村(2000)は「Sって文」とし、岩男(2003)は「～ッテ。」とし、金(2005)は「～ッテ」文としている。名づけは共通ではないが、これらの論考は「引用」という文脈から説明を試みており、「～」という部分にその態度が反映している。小論では、対象とする文の特徴は「引用」にあるのではなく、ッテによって終止しているところこそ重要であると考え、これを「ッテ文」と呼ぶことにする。そして従来「～」とされている部分は必要に応じて「X」とする。

なお小論では、ッテ文は白川(2009)の「言いさし文」の一つであると考える。白川は、形態的側面から「言いさし」で終わっている文をすべて「言いさし文」と呼ぶ²⁾。白川が「言いさし文」として扱うの

1) 他にも「こんなに人を好きだって気持ちになったのは初めてだよ」のような「連体」位置に現れるものもあるが、この現象については独立的に取り上げられたことはない。

は、ケド節、カラ節、タラ節など、接続助詞によって形成される節で終止しているものばかりなのであるが、小論はツテで終止しているものも「言いさし文」と考える。

1 ツテ文についての岩男（2003）の取り扱い

従来、ツテ文については、発話的な意味の記述を行い、そうした意味は当該文中に取り込まれた「引用文」³⁾の出所がどこであるかによって決定されているという視座から説明されることが多い⁴⁾。岩男（2003）も、こうした記述の延長上にある。

- (5) 「明日よろしくね」「え？ 明日って？」
- (6) 「もう終わりだね」「そんなことないって」
- (7) 「(にやにやしているフジヤブに対して) 何？」「いや、うまいこといったって」
- (8) フジヤブ、卒業諦めたって。

岩男は、「引用文」の「元話者」を「聞き手」・「話し手自身」・「第三者」と分けた⁵⁾上で、(5)のように「元話者」が「聞き手」のものを「知識未定着用法」⁶⁾とし、(6)・(7)のように「元話者」が「話し手自身」のものを、前者を「押し付け用法」と、後者を「表出的用法」とし、(8)のように「元話者」が「第三者」のものを「伝聞的用法」としている。

従来のツテ文の扱いはこうした記述で終わりのものが多いのだが、

-
- 2) 白川は「言いさし文」には「関係づけられるべき事態が文脈上に存在する文」という「関係づけ」の場合と、「関係づけられるべき事態が文脈上存在しない文」という「言い尽くし」と、「言うべき後件を言わずに中途で終わっている文」という「言い残し」があるとする。
 - 3) 岩男（2003）の用語。「～ツテ。」の「～」部のことを言う。また、「引用文」の元々の発話者のことを「元話者」と呼んでいる。
 - 4) 守時（1994）、許（1999）、野村（2000）、岩男（2003）、金（2005）などは、こうしたことを行って展開されていると言つてよいだろう。
 - 5) 「引用文」の扱いは、厳密に言えば従来まちまちである。守時は「～の発話」という言い方をするし、岩男は「～のもの」という。これらは、その「所有」の側面から記述しており、静的な捉え方をしていると言える。野村は「情報発信元」とし、金は「情報源」と言う。これらは、その「発信先」の側面から記述し、動的な捉え方をしている。
 - 6) 従来、「元話者」が「聞き手」の場合は「問い合わせ用法」ばかりが注目されてきたが、たとえば(5)のツテ文が下降調のイントネーションで発話されたとき、それは「自問」になる。岩男は「問い合わせ」と「自問」における、発話時の聞き手による処理の共通点に着目して、これらを「知識未定着用法」と呼んでいる。しかし、これは発話の方向性の問題を加えただけなのであって、先行研究の知見を大きく出るものではないだろう。

岩男は各タイプのッテ文について、「引用表現としての性質」の「濃淡」の観察を行う⁷⁾。岩男が「引用表現としての性質」とするのは、(岩男は明示していないが)当該文が砂川(1987)が言うところの「場の二重性」を持つかどうかということに関わる。つまり、Xの成立する「場」と、それを含む主文の成立する「場」とが「別である」というのが「場の二重性」ということであり、そうした「場の二重性」があることを「引用表現としての性質」としているのである。それに従えば、「知識未定着用法」は「引用表現としての性質」が残るとされ、「押し付け用法」は「引用表現としての性質」が希薄になっているとされる。さらに、「伝聞的用法」は、もし(8)が「フジヤブ」本人が「元話者」の場合は「引用表現としての性質」が残り、「元話者」が不明の場合(これこそ「伝聞」と言えるだろう)は「引用表現としての性質」がないとして扱う。また、「表出的用法」は「引用文」が既に心内に成立しているかどうかということは解釈として分かれるところであり、「引用文」が所与であるかどうかは判断しがたいことから、その取り扱いを保留している。

それまでの論考がッテ文について「引用」という文脈からのみ論じていたのに対して、岩男は「引用」性の欠如にも着目することから記述をおこなっており、注目に値する。しかし、岩男は、「引用表現としての性質」が残る場合のッテ文を「引用構文の言いさし」とし、「引用表現としての性質」が希薄のッテ文を「文末形式」としているが、それはッテ文についての記述なのか、ッテについての記述なのか明確でない。その上、「引用表現としての性質」が希薄であるとしているタイプについても、「引用形式」⁸⁾としているッテが現われている理由について説明をおこなっていない。

2 ッテ文のッテの扱い

小論は岩男とは異なりッテ文はすべて「言いさし文」であると考える。それを主張するために、白川が「言いさし文」を記述するに際して作業として退けた、「『完全文』に還元して説明する」という接近法をとる。もちろん、小論も、白川の、「言いさし文」には「言い尽

7) 岩男は「濃淡」としているが、説明をたどる限り、「有無」としなければならないと思われる。

8) 岩男(2003)は「引用形式」を、「引用句「～ト」を形成する助詞「ト」と「イウ」等の動詞が結び付いた形式のこと」としている。

くし」と「言い残し」とがあるという立場は尊重する。「完全文」への還元は、あたかも^ッテ文はすべて「言い残し」として取り扱うということにつながる危険性がある。しかし、それでもなお小論がそうした接近法をとるのは、^ッテ文の^ッテは「助詞」であるという取り扱いができる事を示したいためである。

まずは「言いさし」の場合から⁹⁾。

(9) 「明日よろしくね」「え？ 明日って？」

(9) は「知識未定着用法」である。これは上昇調イントネーションで発話された場合は「問い合わせ」と言われ、下降調イントネーションで発話された場合は「疑惑」的なもの¹⁰⁾となる。これについて岩男は「引用構文の言いさし」として扱っている。しかし、岩男は「引用構文」と言うだけであって、具体的にどのような構文なのかということを明確にしていない。実はこの点は重要な問題を含んでいると思われる。このことを

(10) フジヤブ、卒業諦めたって。

という「伝聞的用法」と比較してみればわかる。今、(10)を「元話者」が「フジヤブ」であるとしたとき、これは次のような「完全文」へ還元できる。

(11) フジヤブ、卒業諦めたって言ってた。

助詞+動詞の形で再現するのは、^ッテを「引用形式」としている岩男の作業とはずれるかもしれないが、「言う」など発語行為動詞を述語に持つ文の「言いさし」として再現してみたとき、^ッテは（引用構文におけるトと同様）格助詞として理解できるであろう。それに対して、(9)は、

(12) 明日ってどういうこと？

となり、名詞述語文の「言いさし」であると言えるだろう。こうした名詞述語文の「完全文」に還元したとき、^ッテは格助詞ではなく、提

9) 「完全文」への還元という作業は、あくまで名詞述語である場合と動詞述語である場合とがあるということを指摘したいためだけであって、主格あるいは主題であるとか、こういう述語でなければならないとかいうことまでを主張したいわけではない。ただし、(9)は「え？ 明日って言った？」というように、言ったかどうかを「問い合わせ」場合もあり得るのである。もちろん、その場合は「動詞述語である」とするだけの話であって、「完全文」に還元したとき、この二つの述語のタイプがあるということを越えるものではない。なお、こうした視座による取り扱いは、従来なされていない。

10) 小論が「疑惑的」と記述したものについては岩男は「「非難」や「理解できない」といった姿勢を表すもの」と記述している。

題助詞として記述されることになるだろう。このように「言いさし文」のタイプを「完全文」に還元したとき、ツテはそれぞれ別の「助詞」として記述される。すなわち、「知識未定着用法」は提題助詞として、「伝聞的用法」は格助詞として記述されることになる。

なお、岩男が「伝聞的用法」で「元話者」が不明な場合として記述したものは、少し注意が必要である。

(13) 昔ここには無幸ばばあというおばけが住んでいたって。
これは(12)の場合と異なって、

(14) 昔ここには無幸ばばあというおばけが住んでいたっていう。
のように動詞述語文であることには変わりがないが、動作性をもつ「言う」ではなく、テンスをもたない「いう」が想定できるだろう。岩男が指摘する「伝聞的用法」の二種は、「イウ」の動作性の濃淡の問題に還元できるのであって、ソウダのようなモーダルな形式との親和性から接近するべきではない¹¹⁾。こうして「伝聞的用法」のツテは(いずれの場合も)格助詞としていいだろう。

次に「押し付け用法」を見てみよう。

(15) 「もう終わりだね」「そんなことないって」
岩男は「押し付け用法」は「文末形式」としている。しかし、これは

(16) そんなことないって思う(よ)¹²⁾。
というように、「思う」という思考動詞を述語にもつ「完全文」に還元できそうである。ただし、「思う」にテンスを発動させたり、他の思考動詞を述語に立てたとき、

(17) そんなことないって {思った／考えた／感じた}。
すると、それは「押し付け」ではなく「引用」としての特徴が発現する。つまり、(15)を「完全文」に還元したものは、述語の思考動詞は「思う」に限定され、一人称主体の省略、さらにテンスがないという特徴を有する。森山(1992)で指摘されていることであるが、こうした構文はダロウとの親和性が高い。岩男は「押し付け用法」のツテを「文末形式」としているが、ダロウとの親和性が高いからといって、

11) 岩男は「伝聞的用法」に現れるツテをソウダとの親和性から記述しているが、こうした態度は、「伝聞である」ということが先んじてあって、それと似ている意味を持つ形式を持ってきたにすぎない。助詞と助動詞との「置き換え」という作業をおこなうのは、あまりにも乱暴である。こうした態度は森重(1954)にも三枝(1997)にも見られる。

12) 「よ」を後続させたのは、「押し付け用法」であるがゆえに、伝達性を明らかにさせたためである。

それが「文末形式」であるということにはならないだろう。「押し付け用法」を(16)のような還元をおこなったとき、「ッテ思ウ」全体で「ダロウ」に相当するのであって、ッテ 자체がダロウに対応するとは言えないからである。その結果、小論ではこれも「言いさし文」として扱う。

ところで、岩男が「押し付け用法」としたものには、実はもう一つのタイプを指摘することができる。

(18) ミキちゃん、もう {諦めろ／諦めなさい} って。

これはッテに前接する要素Xが命令文で、ッテの部分で急激なイントネーションの下降があるものである。こうした例はかなり多く見られるのであるが、この場合も(17)同様、

(19) ミキちゃん、もう {諦めろ／諦めなさい} って思う。

という「完全文」に還元できるので、「押し付け用法」のタイプであることには変わらない。しかし、これは命令文であるがゆえに判断系のモーダル形式であるダロウは後続し得ない。この点が(16)のタイプとは違うところである。ちなみに、命令文の使用は、聞き手に働きかけることを達成しなければならないのに、それを「ッテ思ウ」という形式で、それが「個人情報である」とするのは、「命令の緩和」という結果を生む。そのため、

(20) a それ貸せって！

b それ貸してって！

を比較したときに、「それ貸して」という発言の繰り返し以外 (20)b が許可されにくいのは、「依頼」とはそもそも「命令の緩和」の観点から選択される行為であるからであろう¹³⁾。

次に「表出的用法」を見てみよう。

(21) 「(にやにやしているフジヤブに対して) 何?」「いや、うまいことといったって」

岩男は「表出的用法」については「言いさし」かどうかの判断を保留している。これは「完全文」に還元したとき、

(22) a いや、うまいことといったって思った。

b いや、うまいことといったって思う。

13) 岩男はこれを「引用」にすることで「当該の発話は話し手の独りよがりの意見ではないことを表そうとしているかのようである」としているが、これはまったくの逆の解釈である。

のどちらになるかの判断が困難であることに起因すると思われる。もし(22)aであると解釈されたとき、その「思考内容」は所与であるということになり、(「伝聞的用法」に接近し)「引用構文の言いさし」になるだろう。それに対して(21)bならそれが所与でないところから「文末形式」になるだろう。こうした点から、岩男は「保留」という取り扱いをしているのだろう。確かに文脈を持たないツテ文のままであるときは岩男の言うとおり「保留」とせざるを得ないが、そうした問題は語用論的な問題であり、ツテの問題ではない。そのため、小論では、こうしたタイプの「伝聞的用法」は「言いさし」であることは変わりがないと考える。

以上から、岩男がツテ文を「引用構文の言いさし」と「文末形式」と分けたのに対して、小論ではすべて「言いさし文」であると扱うこととする。繰り返すが、上で「完全文」に還元するという方法をとったのは、あくまで「文末形式」であるという扱いを否定するためであって、あくまでツテ文はツテで終止する「言いさし文」であるということは再確認しておくこととする。

(23) ツテ文はすべて「言いさし文」である。ただし、ツテは、提題助詞の場合と格助詞の場合とがある。

3 ツテについて

ツテは文中のいろいろなところに現れる。それぞれは「引用」にかかわっている場合もあるが、ツテが導入する要素はすべて「引用」にかかわっているわけではない。そもそも、「引用」というのは統語的な機能ではない。砂川(1987)が言うように「引用文」が発話時以外の特定の時空間に定位できるかどうかという観点が「引用」ということを決定することになるのであり、ツテがXを「引用句」であるかどうかを決定しているわけではない。にもかかわらず従来の研究は、森重(1954)がツテの出自を折り込んでツテを記述して以来¹⁴⁾、ツテはアドホックに「引用形式」として扱われることがほとんどである。

統語機能について触れているものもあるが、たとえば三枝(1997)がツ

14) 森重(1954)は、(24)～(27)にあげるようなツテについて、「格助詞的用法」(引用)のツテは「=ト」、「文末形式的用法」は「=トイウ」、「提題助詞的用法」は「=トハ、トイウノハ」、「連体助詞的用法」は「=トイウ・トイウヨウ」、「接続助詞的用法」は「=トイッテ」というように、それぞれ解釈を与えている。なお、湯沢(1954)のように、トテを出自とするという解釈もある。

テには「接続用法」・「係助詞用法」・「接続助詞用法」・「述語用法」・「助動詞用法」・「終助詞用法」があるとしているように、なぜ「述語」や「助詞」や「助動詞」になるのかということを全く説明しないまま記述しているものばかりである。

ツテは、ツテ文以外にも

(24) ミキちゃんって彼氏いないんだね。

(25) ミキちゃんには、別れ話を切り出されたって経験ないでしょ？

(26) ミキは、もう教師しか生きる道がないって、勉強しているんです。

(27) ミキは、いつになつたらあの子と別れてくれるのって言ってるよ。

と、「提題助詞的用法(24)」・「連体助詞的用法(25)」・「接続助詞的用法(26)」・「格助詞的用法(27)」など、現れる位置はもとより、統語機能的にも幅広い分布を示す。ただし、そのように分布をしながら、共通点もある。それはXツテによって導入される要素Xは、いずれも「言語表現」であるということである¹⁵⁾。

まず「提題助詞的用法」について見てみよう。たとえば、

(28) これってどういうこと？

(29) ミキちゃんって東川口だっけ？

に現れる「これ」と「ミキちゃん」は、指示代名詞、固有名詞でありながら、「これ」自体「ミキちゃん」自体を指示しているわけではない。格助詞を後続させたり、ハなどの副助詞を後続させて導入されているXとは違って、Xツテとされたとき、そうした「呼び名」の側面を取り上げているのである。これを「言語表現」と呼ぶことにする。この「呼び名」がある限り、「引用」としてXを扱うのではなく、「言語表現」とすることで広く拾い上げができるようになるだろう¹⁶⁾。

このように、「提題助詞的用法」におけるXを「言語表現」であるとしたときに、ほかの用法も同様の説明が可能になる。まず、「格助

-
- 15) これと似た指摘に、藤田(2000)がトを「メタ形式」としていることがある。しかし、小論が藤田の指摘を踏襲しない理由は、藤田の指摘が文中でのその部分の機能を折り込んでの指摘であるからである。XツテのXは、すべて言語表現についての言語であるわけではないと考えるからである。また田窪(1990)もツテを「メタ用法であるというマーク」としているが、これも「XツテY」という文型全体をメタ的用法と捉えているので、ツテ自体を田窪に従って「メタ的用法」とはしない。
- 16) 竹林(2004)は提題助詞的用法を記述したものであるが、その場合のツテを「引用」として記述している。竹林は「引用」を、「ある領域に存在する要素をコピーして別の領域に持ってくるということ」としているが、こうした「プロセス」を問題にする視座では「引用」の問題は解決できないだろう。また田窪(1990)は「XトイウY」全体で、固有名詞Xを普通名詞に変換する方法であるとしている。

「詞的用法」はしばしば「引用」と扱われるものである。「引用」と言わされることの対象は、ある時空間で成立したり、成立するだろう具体的な発話（や思考）であり、これらもまた「言語表現」として取り上げたものであることに変わりがない。こうして、Xッテによって導入されるとき、「引用」がXの必要条件なのではなく、「言語表現」であるということが必要条件なのである。「引用」というプロセスや、それを折り込んだ「引用句」や「引用文」という性格は、「言語表現」のうちの一つのタイプにすぎないのである。また「連体助詞的用法」は、ッテの出自がトイウであるということと関係しよう。つまり、そもそもトイウという形式であり、そのイウが連体形であるということから、ッテであっても連体の位置に現れることが許可されている。トイウについては田窪（1990）が述べているように、言語表現の形の側面を導入するのに貢献する形式であり、そのことからッテがXを「言語表現」として機能させているということを示している。なお、こうした出自の問題を持ち込むなら、トイウという形式の「イウ」の部分に、「言う」という動作性を具体的な意味として保存している場合には発話や思考の「引用」で、そうした意味が希薄になったのが「呼び名」であるとしてもいいかもしれない¹⁷⁾。「接続助詞的用法」もこれと似ている。つまり、ッテの出自がトイウであり、さらにそのイウに動作性が残る「接続助詞的用法」を許可していることと、ッテが、接続助詞としてのテと同形であるということから、その用法は支えられていると言えよう。

以上から、ッテとそれを後続するXには次のような説明を付すことができるだろう。

- (30) ッテは、文中で要素Xを「言語表現」として機能させる助詞である。「言語表現」Xは文中のいろいろな個所で機能させられることが可能であることから、ッテの統語機能は一定ではない。

17) 山崎（1996）は次の文を許容が困難な例として提示する。

・??お金を引き出そうって銀行に行った。

山崎は、これについて現象的な取り扱いしかしていないが、この文が許容されにくいのは、もしッテが「格助詞的用法(引用)」と解釈されれば許容されるが、その位置から「連体」として「銀行」を修飾してしまう解釈可能性もある。こうした解釈上の揺れを回避するためにも、その形式を許可しにくいとすると理解できるだろう。

4 ッテ文の構文的特徴と発話的意味

4-1 前提

ある時空間において成立した発話は、

(31) 「行きます」「え？行きます？」

という「問い合わせ」によって、その発話だけを取り上げることや、

(32) 「行きますよ」「いやいや、行きますよはないよね。」

のように、その発話自体についてコメントをする場合もあるが、その発話を含む出来事全体から「発話者」「発話」「行為」をそれぞれ分節し、事象叙述として「AガXトBスル」という文型をもって文に表すことができる¹⁸⁾。この場合、発話者Aと発話Xの提示に比べ、行為Bスルは解釈者の解釈に依存する。ある行為を「言う」・「怒鳴る」・「書く」などの発語行為動詞として差し出す場合も、「命令する」・「質問する」・「伝える」などの発話内行為をあらわす動詞として差し出す場合も、「思う」・「考える」・「気づく」などの思考動詞として差し出す場合も、「皮肉を言う」・「教える」・「叱る」などの発語媒介行為をあらわす動詞として差し出す場合もあるだろう。こうしたBスルの存在は、その行為の内容を情報として伝えるだけでなく、Xがどのような行為（Bスル）によってもたらされたものであるのかということも含むことになる。もし、Bスルが、発語動詞の場合は、Xは、音声的実現体(形)的部分が役立てられていると解釈されるし、思考動詞の場合はそれは思考内容だと解釈されるし、発語内行為の動詞や発語媒介行為の動詞なら、Xの表意explicatureのみでなく、発話意図をも反映していると解釈されるだろう。このような分節を経過して文で提示されたとき、文に含まれるXは、述語Bスルによって、その特徴が明示されることになるのである。こうしたことを探した上で、以下ではッテ文の構文的特徴を見る。ただし、もしッテ文が白川の言う「問い合わせ」の場合である時は、Xッテ以外の構文的要素はほかの部分において補てんされているから、ここで問題にするのは「問い合わせ」の場合のみであるとする。

4-2 構文的特徴

「問い合わせ」としてのッテ文の構文的特徴は、

18)もちろん、こうした既存の発話のみではなく、「あいつ行くと言うだろう」など、断定保留の文脈でも可能である。このように発話場とずれがある場合すべてを「場の二重性」と扱い、それはすべて、こうした文型で差し出すことが可能である。

(33) 述語がない。

ということである。この特徴を持つことがッテ文のいろいろな特徴を決定する。

まずは、ッテ文におけるXは、それがどのような行為的な解釈を付随させて提示されているのかということが明示されないということが言えるだろう。発語行為なのか発語内行為なのか発語媒介行為なのかということは全く反映することはできないし、さらにそれが発話なのか思考内容なのかすら、当該文内においては明示されないのである。さらに、述語がないため、ッテ文のテンスは明らかにされない。そのため、Xの成立時は、当該ッテ文内においては決定され得ないことになる。また、テンス同様、モーダルの形式も現れないため、複雑な認識のありようは当該ッテ文においては表現されることがない。

続いて、ッテ文の特徴としては

(34) 「元話者」は明示されない。

ということがある。これは「述語がない」ということと連続的な特徴である。

(35) フジヤブ、卒業諦めたって。

という「引用」的な表現の場合、一見すると「元話者」があるように見えるが、その「フジヤブ」は「諦めた」の動作主であって、「元話者」ではない。また、「押し付け用法」の場合も、

(36) ミキちゃん、諦めなって。

「ミキちゃん」は呼びかけられた対象であって、「元話者」ではない。以上から、ッテ文の構文的特徴は、次のように記述されることになる。

(37) うたは「Xッテ」という要素のみによって成立する文である。こうした構文的特徴を持つとき、小論が3で述べた「ッテ」の機能のみが、ッテ文の意味を決定することになる。つまり、

(38) うたは「言語表現」であるXを差し出す文である。
と言えるのである。

4-3 発話タイプ

うたは(38)で述べたように、「言語表現」であるXを差し出すという文であるが、そのように差し出すのにはいろいろな理由があるだろう。

たとえばある言語表現を経験したとしよう。その言語表現に対して表意の割り当てに失敗したり、その意味についての真理値の決定が解

枳者においてできないときなど、その言語表現は「言語表現」として差し出すことがある¹⁹⁾。だからこそ、話し手と聞き手が共存する場の眼前において生起している出来事については、「言語表現」としてXを差し出すことは稀である。

(39) あそこを犬が走ってるって。

この文が適格性を持つのは、その出来事の生起が直接経験できないときか、話し手と聞き手が共存している場面で生起した出来事でありながら、聞き手がその出来事を認識していないことが判明したときに限られる。目の前で起きている出来事で、聞き手もそれを認識していることが確実であると判断できた場合は、(39)は使用できないのである。

以上とは別の理由もある。話し手においておこなった真理値決定の結果、何らかの理由で、それを断定として差し出せない（消極的）か、あるいは差し出さない（積極的）かといった状況にあるとき、それは「個人情報である」という取り扱いのもと、「言語表現」（思考内容）として差し出すことになる。

このようにいろいろな理由からXは「言語表現」として差し出されるのであるが、その差し出し方には二通りのあり方があると考えられる。一つは、真理値が不明であったりすることを原因として、「言語表現」Xとして差し出す場合であるが、この場合は、「疑問」の形をとって差し出される²⁰⁾場合と、「言語表現」のまま「演述」の形で差し出される場合とがある。前者が岩男の言う「知識未定着用法」で、後者が「伝聞的用法」に相当する。一方、これは「個人情報である」として取り上げたいということを理由として、「言語表現」Xとして差し出す場合は、「演述」の形をとって差し出される。これは岩男の言う「押し付け用法」に相当する²¹⁾。以上をまとめると次のように

-
- 19) もしその言語表現が真であると認識できれば、わざわざ「言語表現」として差し出す必要はない。たとえば、「徳川家康が江戸幕府を開いた」ことは現代においてはそもそも伝聞情報である以外は考えられないにもかかわらず、「徳川家康が江戸幕府を開いたって」という表現に出会うことは少ない。この情報は、我々は何かの理由で真であると疑うことは少ないからである。
 - 20) 「大軍が押し寄せて来ました！」「何だって！」この場合の疑問型はどのように取り扱えばいいのだろうか。「何だって」以外に、「何！」・「何だと！」なども用いられる事から、「大軍が押し寄せてきた」という発話を受けてのッテ文であることは確かであるが、「何」の部分はッテ文だけの問題ではなさそうである。「何だ」という疑問語を含んだ文の問題が大きく関わる問題であり、稿を改める。
 - 21) 岩男の「表出的用法」は、小論においては独立するのではなく他の用法のバラエティと考える。

るだろう。

(40) 「言語表現」としてXを差し出すにはそれぞれ理由があり、その理由に応じてッテ文は「疑問型」と「演述型」という表現上の性質を帯びる。

この説明は従来のものとは大きく異なる。従来のものは、当該ッテ文のXがその文以外の発話などとどのように関わるのかという視座からッテ文の記述と説明をおこなってきた。それに対して小論ではXが「言語表現」であるとして差し出す文がッテ文であるとし、そのXの、当該ッテ文以外の要因によって性格づけられる部分は、ッテ文にとつて一義的なことではないと考える。たとえば、従来の研究でもっとも根本におかれてきた、Xとして取り上げられる「言語表現」の「元話者」がだれであるのかという観点も、「疑問型」か「演述型」かの決定に貢献することはあっても、それはッテ文の本質的な性格ではないと考えるのである。つまり「聞き手」であるなら、それはその発話内容が理解できない、あるいは納得できないなどの理由によって、それを聞き手自身に対して問い合わせたり、話し手自身において問い合わせたりといった差し出し方になるだろう。また、話し手自身や第三者ならば、それを聞き手に言語表現として伝えるといった差し出し方になるだろう。しかし、小論で見たように、Xは「元話者」をもたない、つまり話し手自身の発話時における思考内容であるという場合もある。この場合はそれを「個人情報」として差し出すということになるだろう。こうして、ッテ文については「元話者」という視座からは説明し尽くせないということがわかるだろう。

おわりに

従来ッテ文は「引用」という文脈において記述され説明されてきた。しかし小論では、「引用」ということは、ッテ文の「外」にある事柄であり、ッテ文とは「言語表現」としてXを差し出す文であるということと、従来のッテ文の発話のタイプは語用論的に現れるものであって、ッテ文は「疑問型」と「演述型」の二つのタイプがあるということを明らかにした。

【引用文献】

- 岩男考哲(2003) 「引用文の性質から見た発話「～ッテ。」について」『日本語文法』3-2 (日本語文法学会)
- 金 善眞(2005) 「「ッテ」文の引用的性質と機能」『日本語文法』5-1 (日本語文法学会)
- 三枝令子(1997) 「『って』の体系」『言語文化』34 (一橋大学)
- 白川博之(2009) 『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 砂川有里子(1987) 「引用文の構造と機能—引用文の3つの類型について—」『文藝言語研究 言語篇』13
- 田窪行則(1990) 「対話における知識管理について」『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂
- 竹林一志(2004) 『現代日本語における主部の本質と諸相』くろしお出版
- 野村真一(2000) 「「S って文」伝聞用法の分析」『金沢大学語学・文学研究』28号
- 許 夏玲(1999) 「文末の「って」の意味と談話機能」『日本語教育』101-7
- 藤田保幸(2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院
- 森重 敏(1954) 「「て、って」「てば、ってば」「たら、ったら」について」『国語国文』23-11
- 守時なぎさ(1994) 「話し言葉における文末表現「って」について」『筑波大学応用言語研究』1
- 森山卓郎(1992) 「文末思考動詞『思う』をめぐって」『日本語学』11-8 明治書院
- 山崎 誠(1996) 「引用・伝聞の『って』の用法」『国立国語研究所研究報告集』17 秀英出版
- 湯沢幸吉郎(1954) 『増訂 江戸言葉の研究』明治書院

(本学教授)